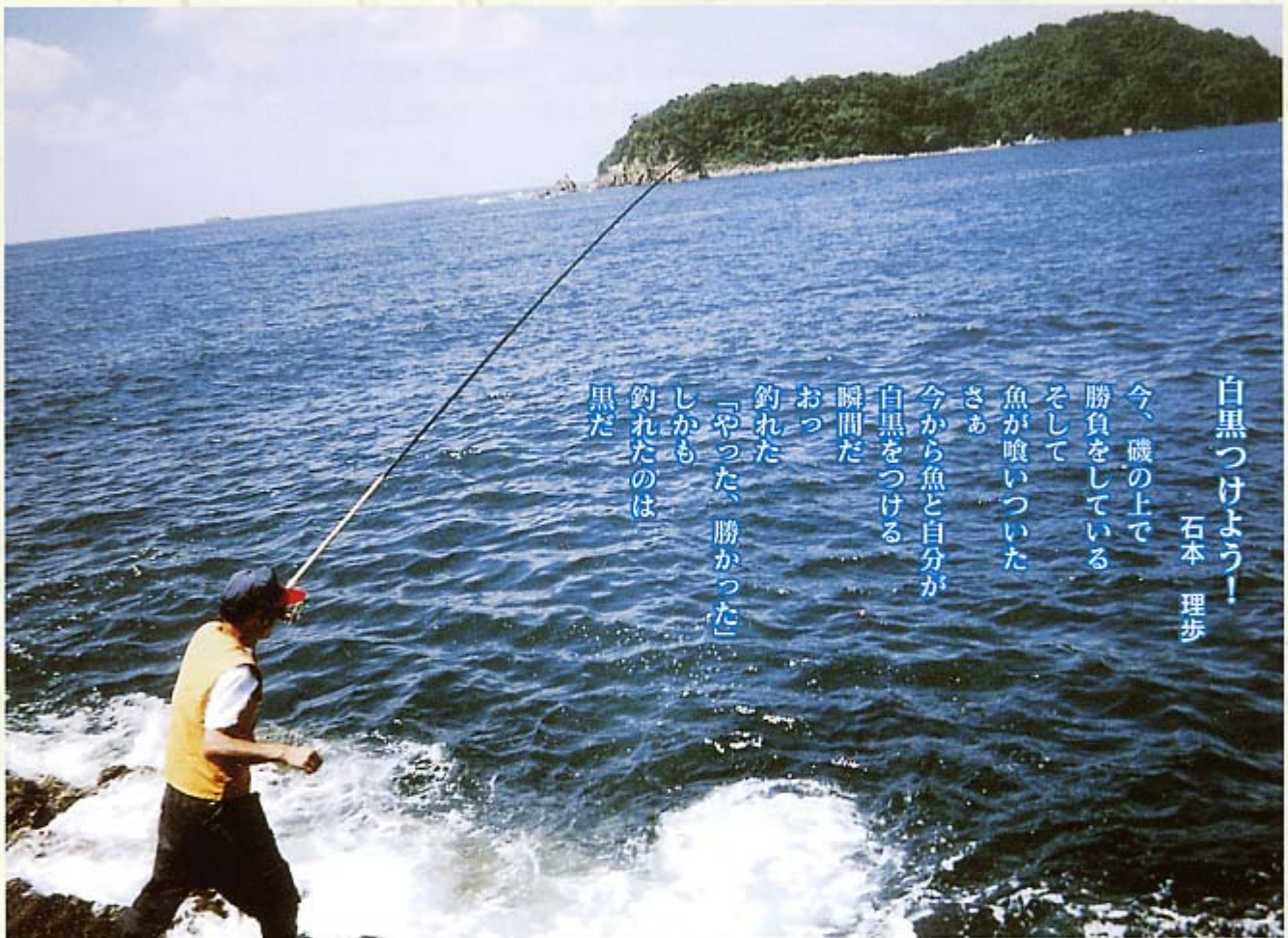


菜の花だより

No.2

発行/菜の花法律事務所 発行責任者/国宗直子
熊本市江越1丁目17番12号 フローラル江越105号
TEL.096-322-7731 FAX.096-322-7732



白黒つけよう!

石本 理歩

今、磯の上で
勝負をしている
そして
魚が喰いついた
さあ
今から魚と自分が
白黒をつける
瞬間だ
おっ
釣れた
「やった、勝った」
しかも
釣れたのは
黒だ

菜の花法律事務所開設から2年足らず。

私たちは、大切なスタッフを失ってしまいました。

7月11日午前2時40分。石本龍猪事務長は、私たちの手の届かないところへ旅立って行きました。

弱冠45歳。あまりにも早い別れでした。

彼は、私の仕事の上の重要なパートナーでした。菜の花法律事務所に、なくてはならない人でした。

私たちは、石本事務長を忘れません。真摯でまっすくな彼の生き方は、私たちの手本でもあります。

彼をご存知のみなさんと、彼への懐かしい思いを共有したくて、このニュースをお届けします。

石本さん、私は今この場所においても、まだ信じられない気持ちです。

だって、あなたは、癌の診断を受けたときも、退院して通院生活を始めた時も、再度入院になって、くわみず病院へ移ったときも、きっと治るからと私に何度も言って、私も無邪気にそれを信じてきました。事務所にいけば、きっといつもの黒いカバンを抱えて、「忙しい、忙しい」といった顔であなたが入ってくるような気がします。

私たちの最初の出会いは、私が修習生で熊本中央法律事務所を訪問したときからですから、もうあれから17-8年は経つのですね。それから私は熊本中央法律事務所に弁護士として入所し、一緒に仕事をするようになりました。私の事務を集中して担当してくれるようになり、いろんな事件をやりましたね。一緒に事件の現場に行ったりするのもとても楽しい時間でした。

一度、有明海の干潟にあるアサリ養殖場のアサリの保全手続に行ったことを覚えていますか？ 海の中のアサリを保全するなんて突拍子もない思いつきで、執行官もびっくりしていましたね。二人で大きな長靴を履いて、干潟を歩き回りながら、ザクツというアサリの感触を楽しみましたね。大きな発砲スチロールに執行官の公示文を貼り付けて、ビニールでぐるぐる巻きにして、潮が満ちてきた海に浮かべるのもあなたのアイデアでしたね。あの時の思い出は楽しくて、そのあとも、あのときはこうだったあだったと、何度何度も笑い話として語り合いましたね。

仕事が忙しくなってくるとパニックになってしまう新米弁護士の私を、あなたはいつも励まし、アイデアをたくさんくれました。当時から、あなたは、弁護士の指示通りに仕事をするだけの事務員ではなくて、私のパートナーでした。私の事件の内容をよく理解し、私と一緒に考えてくれて、適切に仕事を支えてくれました。私はそれに甘えて、本当に困ってくると、具体的な指示ではなく、「石本さん、何とかして」なんて頼んだりして、時々、ほかの弁護士が窮地に立つ私に「石本さん、何とかして、でしょ？」と冷やかしたりしました。



石本君といえば海が浮かぶ。海を愛し、釣りに興じ、いつも遠くを見つめていた

事務長だった重松さんが議会に出てからは、あなたが熊本中央法律事務所の事務長としてその屋台骨を支えてくれました。自分勝手な弁護士たちの中でそれを調整する仕事は本当に大変だったと思います。わがままな私にもいつも適切な意見をくれました。一度、私は真剣に思いつめて熊本を出る決心をしたことがありました。いろんなことが重なり、私は逃げ出すことしか考えませんでした。東京に移転先の事務所まで決めてきて、本当に移転の準備を始めようとしていた時、私の話を聞いてくれて、必死で引き止めてくれたのもあなたでした。あの時、「一緒にがんばろう」と言ってくれたあなたの言葉がなければ、私はここに踏みとどまることはできなかったと思います。その後の葉害エイズやハンセン病の仕事など、弁護士としてやりがいのある仕事をこの熊本でできたのも、全部あなたの励ましがあつてのことでした。

加藤先生や、板井先生が立て続けで病気になり、事務所が大変だった時期も、あなたは、病院と事務所を行ったり来たりしながら、事務所の仕事の継続を守ってくれました。あなたの献身的な働きに、お二人の先生方もどんなに感謝しておられたことでしょうか。ひたすら真面目に、尽くして、尽くして、誠実に仕事をすることは、あなたの本領でした。

裁判にかかわる様々な運動の中でのあなたの存在も重要でした。今でも語り草になる水俣病訴訟での熊本から水俣までの100キロマラソンの実現は、あなたなしには考えられない企画でした。名前だけの実行委員長の私に代わって、あなたは企画を担当し、実行の切り盛りを一人で引き受け、しかも夏のあの炎天下、あの100キロのコースを走りぬきましたね。その姿を見て、2年目からは私も一部と一緒に走りました。水俣に着いたときはみんなクタクタだったけれど、あのときのお弁当のおいしかったこと。

ハンセン病訴訟でも、あなたは、いつも熊本の支援の会の活動に参加していました。判決の前夜集会のときに、あなたはもう一度走る企画を立ててくれました。菊池恵楓園から会場の白川公園まで、みんな無事に走りぬく

ことができたのは、あなたの完璧な企画のおかげでした。そして健康に走りぬく人たちの中には、いつもあなたの颯爽と走る姿がありました。

労働組合のこと、クレジット・サラ金についての運動のこと、国民救援会のこと、どれもあなたが一生懸命に手がけてきた仕事でした。一人一人が幸せに暮らすことができるように、そういう社会が来るようにと、絶えずあなたはたたかってきました。

二人で事務所を独立しようと決めたとき、二人で夢をいっぱい語り合いましたね。地域に根ざして、地域の運動を応援できる法律事務所にと。それを語る時のあなたの熱っぽい早口のしゃべりは、私の胸をも熱くさせました。菜の花法律事務所の「菜の花」の名前もあなたのアイデアでした。独立に際しての様々な団体との調整もすべてあなたがやってくれました。事務所の運営が落ち着いたら、あなたが司法書士の資格を取って、二人の共同事務所にと、先のことも一緒に考えましたね。「石本さん、何とかして」という私の甘えはどうとう変わらないままでした。

「よみがえれ有明海訴訟」が始まって、熊本の運動の旗頭になるという話があったとき、小さな事務所の事務長としては大変な仕事だったのに、あなたはそれを果敢に引き受けようと思いました。去年の暮れ、有明海の現地調査から帰ってきたあなたは、たくさんの写真を見せてくれて、この写真はこうだああたといろいろ説明してくれましたね。海や魚の話をしているときのあなたの目は、いつも一段と輝いていました。今思えば、すでにあの頃から、あなたの体調は普通ではありませんでした。

去年の秋頃から、一度みんなで釣りに行こうと約束したのを覚えていますか。「春になったら」。そういう約束でしたよね。天草で、船も出そうって。よく釣れるところを教えてくれるって。けれど、病床にあったあなたは、春には行けなくて、でも「良くなったらきつと」と言いましたよね。

病床のあなたは、最後の最後まで、回復を信じてたかいつづけました。けっして弱音を吐かず、あきらめることなく、生きて仲間達と共にたたかうことを願い続けました。そのあなたの強い意志を、私たちはけっして忘れることはありません。いつも、困難なことに直面しても、私たちはあなたのように、粘り強く、強固な意志でたたかい続けましょう。あなたの生きた証を私たちが受け継いで、一人一人が幸せになれる社会を築いていくことができるよう、どうか私たちがこれからも見守ってください。

石本さん、本当にありがとうございました。



かつて所属していた熊本中央法律事務所のメンバーと事務所旅行の一コマ



「春になったら天草で船を出そう」という約束だったが...

石本龍猪君のおもいで

弁護士 加藤 修

石本さんは、何事にも真つすぐな人でした。熊本中央法律事務所の事務長として、私や他の弁護士の補佐をして飛び回っていました。

私は、国民救援会熊本県本部の会長として、事務局長の石本さんと一緒に救援会の役割を果たすために一緒に頑張ってきました。

お互いなんでも話し合える友人として日本共産党を大きくする闘いや、水俣病やハンセン、クレサラの闘いの中で共に闘ってこれたことを思う時、大きな悲しみに包まれます。

石本さん、安らかに眠り下さい。

あじさいの ひときわ青く 雨に濡れ
君逝きし日の 浜民の空



彼は長距離ランナーでもあった水俣病問題の解決をめざして、「熊本・水俣」100キロマラソンを成功させた

まだ夢の中にいるようです。『ただいまあ』と笑顔で帰って来るようです。叶うことなら、もう一度あのあたたかい手をしっかりと握り締め、日々のなにげない生活を一緒に送れたらほんとうに幸せだろうと思います。

思い返せば、25年前夫と出会った当時、将来『法律関係の仕事について活躍したい。』と熱く語ってくれました。それから20年間、その夢の職に就き、精一杯力を注いできました。

また一方では、家族を愛し、子供達には勿論、妻の私にもとても優しい夫でした。マラソンの趣味に始まり、大好きな海を相手に魚釣り、釣りクラブの仲間との交流を楽しく話してくれたことが懐かしく思い出されます。

そして病に罹ってからの半年の日々は、決して諦めることなく『絶対に治す』『絶対に良くなる』という信念を持ち、最後まで生き続けるその姿は、人生そのもののポリシーがつまっているようでした。夫を思い涙あふれる時、23歳で戦死された詩人竹内浩三さんの家族に書き送った『人間ノタッタヒトツノツトメハ生キルコトデアル』この言葉が夫からのメッセージと思われ、自分を励ましてくれます。

生前、皆様には最愛の夫が大変お世話になり、深く感謝致します。ありがとうございました。



家庭を大事にする人でもあった
保育園主催の「いも掘り遠足」での一コマ

釣友で一番の理解で有った石本龍猪さんへ

熊本潮浮会 平井 秀文

石本さん、その後そちらでの釣果はどうですか？

私と石本さんの出会いはクラブ入会からで、まだまだこれからが本当のお付き合いの始まりで、お別れは早過ぎますよ。

入会当初、松岡会長と牛深沖、片島で初めて尾長グロを釣り感動。その後メキメキ実力をつけ、たびたび大会で優勝、入賞され、平成12年4月、松島兄弟島でのチヌは大きかったですね。その年の年間大物賞に輝きました。大矢野でのクリーン作戦も「熊本の海を愛し、子孫にいつまでもきれいな海を残そう」とのクラブの基本理念をもとに、率先して参加されました。

これからの時代は、自分だけが釣りを楽しむ時代ではない。少しでも他人の方のお役に立てばとボランティアで始めた「電動車イスの会」の皆さんとの天草での釣り大会でのご活躍、翌朝の熊日新聞に石本さんの姿が写っていましたね。

「釣りという作業は人間の本能の一つであり、健常者も障害者も変わりないとの信念で初めて参加し、限られた環境、時間のもとで障害者の皆さんと同じ目線でひと時を過ごせたのは大変有意義だった。言葉に言い尽くせない爽やかな気持ちになった」の後日談に大変感動致しました。

「倅せな釣りに倅せな家庭なし。倅せな家庭に倅せな釣りなし」と誰かが言っていますが、石本さんの家族を見ますと、見事に「倅せな家庭。倅せな釣り」を実践なさっていたんだなあと私自身反省し、石本さんを見習います。

仕事も十分こなし、その時その時を充実して過ごされた方でした。これからも私が釣行する時は形見に頂いた浮子を石本さんと思い、必ず同行することをお約束します。

さようなら。



「倅せな家庭、倅せな釣り」を実践できた釣り人であった

石本さんとよく天草の海へ魚釣りに行きました。釣行はいつも金曜日の夜中に出発。琴平の自宅へ迎えに行くと、毎回奥さん、龍一君、理歩ちゃんの皆が揃ってお見送り、家族の絆の深さにいつも感心していました。

肝心の魚釣りはもちろん、目的地に着くまでの片道2時間、石本さんと交わす会話も大きな楽しみでした。仕事のこと、日本の国の未来のこと、今取り組んでいる活動のこと、目的地へ到着するころには二人とも口の中が乾いてカラカラになっています。

石本さんは「焼きサバ」、僕は「サラダ竹輪」をヒライ大矢野店で買うのが決まったパターン。車に戻れば、ここの「焼きサバ」はなぜ美味しいのか、眼を輝かせてのグルメ談義が始まります。それは何度聞いても楽しいものでした。

その上、毎回印象的な出来事ばかり。釣りに夢中になって子猫をクーラーボックスに入れたまま移動した「子猫失踪事件」（子猫は無事に救出されました）、人里離れた真夜中の磯で2匹のヤギと遭遇して二人で顔を見合わせた「不思議の国のアリス事件」、一度にカニとタコとクワを釣上げた「通詞島“漁夫の利”事件」。尽きることはありません。

「五足の靴」のことを教えてくれたのも石本さんでした。明治40年（1907）の夏、若き与謝野鉄幹と、その同人である北原白秋、吉井勇、木下空太郎、平野万里の「5人の詩人」が、長崎から暴風の荒海を、船で天草のへ渡り、多くの歌を詠んでいます。「五足の靴」のことを熱く語る石本さんは、グルメ談義の時とはちがって「文学青年」の一面を持っていました。

晩年に再び天草を訪ねた吉井勇が、すでに逝ってしまった四人を懐かしんで詠んだ、

白秋とともに泊まりし天草の 大江の宿は 伴天連の宿

という短歌を石本さんは誦んじてくれました。その時の声が今でもはっきりと記憶に残っています。

その石本さんとたくさんの時間を共有できたことは、僕にとってこの上ない宝となっています。ありがとう、石本さん。 友逝きて ひとり訪ねし天草の 海には蒼き水尾（みお）のひとすじ 靖夫



最も親しかった友人の一人である大畑氏は「文学青年でもあった」と彼を評する

永遠のやすらぎを

熊本県人吉市在住 松田 譲一

石本氏の訃報を耳にした時、我が耳を疑い、愕然とした。

今年に入ってから、何回かお会いし、平成12年から、私ども会社の懸案の事で、最終段階の進捗状況を確認し合い、この事が、法的に片付けられたら、新しい気持ちで、再出発できると、一緒になって喜んでいただいた事が、忘れられない。

回数多く、お会いした訳ではなかったが、会う度に、私どもの話を親身になって聞いて頂き、弁護士先生と一緒に、適切に対応、助言していただき、本当に私にとっては頼もしい存在の方だった。

時には、法的なむずかしい話や、時には、冗談を言いながら微笑む人なつこい語り口のお顔を思い出すと、本当に胸が痛い。

体調不調との事は、聞いてはいたが、食べ合わせが悪くての内臓の検査と聞いていたので検査入院が終われば、又元の元気な石本さんにお会いできるものと、思っていたのに至極残念でしかたがない。

又、環境問題に関しても関心が高く、川辺川ダム問題については、私の地元の事でもあり、仕事ともつながりが深く、おおいに共鳴しあったりして、親しみが益々湧いた石本氏であった。

今回お付き合いができたのは、私どもの会社の問題がきっかけで、弁護士事務所を通して、お近づきできたわけだが、この問題が、解決したあかつきには、ひとりの知人として、未永くお付き合いしていただきたい人であった。誠に残念です。

今回のこの早すぎる逝去は、氏を知る方々にとっても悲しい出来事ではあるが、もっと深い悲しみに接して居られるのは、氏が愛しておられたご家族の方々に、この事を思うと、やりきれない気持ちでいっぱいです。ご遺族に深い哀悼の意を表し、石本氏のご冥福を心から、お祈り申しあげます。

石本さんとの付き合いは長いわけではありません。私は、よみがえれ！有明海訴訟の仮処分の事実上の結審が近づいた2003年11月末、長崎から単身赴任で佐賀に移ってきました。熊本への支援する会は他の3県から半年ほど遅れて2003年夏に結成されましたが、事務局長不在で活動がなかなか軌道に乗りませんでした。事務局長を決めることが最大の課題でした。

そんな中、大牟田の北園さんから今度熊本支援する会の事務局長に石本さんがなれることを聞きました。つりが好きでもってこいの人だとのことでした。

4県支援する会の会議に、北園さんと一緒に参加されたのが彼との初めての出会いでした。その時のこにこ笑っていたあの笑顔をおぼろげに覚えていることはできません。いい人が事務局長になってくれ、熊本支援する会もこれでやっと軌道に乗ると安心しました。

彼は、早速熊本の仲間呼びかけて現地を見なければと諫早湾干拓事業の現地調査を計画してくれました。その後、裁判があるたびに傍聴に参加し、漁民の意見陳述を聞き、有明裁判の重要さを身体で感じ取ってくれたと思います。東京での公害調停にも参加してくれました。非常に行動的な人と期待に胸が膨らみました。ところが、身体を悪くして入院したとの話が伝わってきました。やっと4県が一線に並んで支援する会の活動ができると思っていた矢先でした。

その後、見舞いにも行けず、葬儀会場の釣り仲間と一緒に写った写真を見たとき、本当に大事な人を亡くしてしまったと心から感じました。

待ちに待った諫早湾干拓工事差し止めの仮処分決定が8月26日に出されることになりました。これを契機に水門開放、有明海再生に大きく踏み出せるよう漁民のみなさんと一緒に今総力を挙げています。彼の願いのひとつだった「宝の海・有明海」を必ず取り戻すため、私もさらに頑張りたいと思います。



諫早干拓から有明海を守るたかひは彼の最後の仕事となった。大きな進展を見せつつある「守れ有明」の闘いを見守ってほしい。

本当に残念です。

熊本市議 重松孝文

原稿の締切りが過ぎて、まだ書く気にはなれませんでした。いつもうらやましいくらい元気いっぱいだった龍猪くん。ガンを告知されてからも家族ぐるみで闘っていた姿。亡くなる3日前に交わした握手の力強さ。亡くなったことが未だに信じられなかったからです。

おもえば、私たち夫婦が最初に媒酌人をしたのが龍猪くんと美也子さんの結婚でした。その頃は、龍猪くんのことはあまり深く知りませんでしたが、「年下だけど、思慮深い賢明な美也子さんが選んだのだから間違いないだろう」と感じていたのを今でも思い出します。

その後、龍猪くんが中央法律事務所に入ってきましたが、板井弁護士の指導や本人の努力でめきめき頭角を現してきました。私に日本共産党熊本県委員会から市議会議員候補としての要請があったとき、仕事に関して何のためらいもなかったのは、龍猪くんが引き継いでくれると確信していたからです。中央法律事務所の事務局長だけでなく、国民救済会の事務局長まで引き受けてくれました。後顧の憂いなく市議選と議員活動に専念できたのは龍猪くんのお陰でした。しかも、私が事務長時代にやろうとして出来なかった「サラ金・クレジット」被害者の組織を結成することも見事に実現しました。吉田さんという素晴らしいパートナーを発掘し、司法書士の矢野先生をはじめ、弁護士・司法書士の協力を得て、いまや全国をリードするような「被害者の会」にまで発展しましたが、やはり立ち上げまでに縁の下の力持ちとしての役割を黙々と果たした龍猪くんの存在が大きかったと思います。

私が議員になってからも、何でもお願いすればすぐに引き受けてくれましたし、逆に龍猪くんの方からもたびたび相談に来ました。いつかゆつくり出来たら魚釣りに一緒にいきたいと話していましたが、それが出来なくなり、ほんとうに残念です。

編集後記

あれから4ヶ月が過ぎた。折々に「彼がいたら・・・」と思う。早かれ遅かれ人は逝く。生きる者はいつか気持ちの区切りをつけねばならぬ。この「たより」が、それかとも思う。